

深浦校舎図書だより

村

上春樹氏がフランス学士院のチノ・デルドゥカ世界文学賞に選ばれました。この賞は、1969年に創設され、「現代のヒューマニズムのメッセージ」を表現する作家に対して授与されるもので、その賞金はノーベル文学賞に次ぐ高額だそうです。毎年ノーベル賞の発表の時期になると、村上春樹氏がノーベル文学賞を受賞するのではないかと期待されていますが、このチノ・デルドゥカ世界文学賞を受賞した後にノーベル文学賞を受賞した作家もいるそうです。



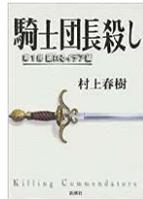
代表作↑

ノルウェイの森

本校の図書室にも、村上春樹著の作品がたくさんありますので、ぜひ1冊読んでみてください。

図書室の村上春樹作品リスト

意味がなければスイングはない	恋しくて	東京奇譚集	1Q84	騎士団長殺し	一人称単数
村上ラヂオ	村上ラヂオ3	サラダ好きのライオン	猫を棄てるー父親について語るとき	もし僕	
らのことばがウィスキーであったなら	海辺のカフカ	羊をめぐる冒険	風の歌を聴け	197	
3年のピンボール	ねじまき鳥クロニクル	ダンス・ダンス・ダンス	女のいない男たち		



春休み中に読んだ本の紹介

※図書委員の竹内結南さんが入力作業をしました

野菜の学校 おいしさの基本を知る (野菜のワークショップ/著 竹内 結南)

この本は、野菜と生活習慣病についてや、野菜をとるための調理の工夫などを知ることができます。私は普段、野菜をほとんど食べず偏った食生活をしていましたが、この本を読んで野菜をたくさん食べようと思いました。また、じゃがいもやだいこんを使った簡単な料理を作りたいと思いました。農業の始まりについてや野菜の特性についてなど、野菜についてさまざまなことを学ぶことができるので、食生活を見直すきっかけにもなると思いました。



ぼくはイエローでホワイトでちょっとブルー (ブレディ みかこ/著 中林 千花)

舞台は英国にある、人種も貧富のさもごちゃまぜな元底辺中学校。そこに通い始めたぼくと母親が、学校で毎日のように起きる事件について、考え悩み、乗り越えていく実話をもとにした小説である。人種差別やジェンダーレスなど、社会問題についての話が多く、自分もそういった問題に目を向ける良いきっかけになった。

人種も言語も、着る制服だって同じな日本の学校に通う自分にとって、外国の学校は多様性が認められているイメージがあった。確かに学校という大きなくくりで見れば自由な学校はたくさんあるだろう。しかし、多様性を認められない団体も個人もいることを知った。自分も偏見に囚われていたことに気づかされ、世界が広がるきっかけになった作品。



ファーストラヴ (島本 理生/著)

永谷 来姫

この本は父親を刺殺した容疑で逮捕された女子大生の聖山環奈が、取り調べで「動機はそちらで見つけてください」と言ったことから物語が始まります。登場人物の過去が細かく書かれていて、読んでいて辛く苦しくなる所が多いという印象でした。私はこの本を読み終えたときに、体験したことのない事ばかり描かれていたので、共感したり、自分と同じだと感じる事が一度もありませんでした。私はこの本で、心の中で泣くという、本当の意味を知りました。



思わず考えちゃう (ヨシタケシンスケ/著)

西崎 未空

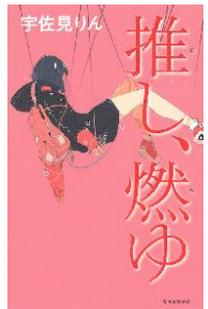


この本は思わず考えちゃう、改めて見ると不思議に感じる現象を作者が感じたままに短く書き表わした本です。私が共感した部分は「ききうでのツメは切りにくい」と「一番きたなくない部分ってどこだろう」というお話です。ききうでのツメは切りにくいの当たり前だと自分でも思っていました。近すぎるからできないことって沢山あると思います。そして、一番きたなくない部分ってどこだろうというのはトイレで起きた現象です。作者のヨシタケさんは外のトイレでどこがきたなくないのだろう感じたそうです。実際私もこのコロナ禍でトイレに行くと、きたなくなさそうなところに触れてしまいます。でもそれは逆にみんなが触れているところでもあると気づかされました。

推し、燃ゆ (宇佐見 りん/著)

堀内 彩名

主人公のあかりは、精神的な病を抱えて皆が出来るような普通のことが出来ない女の子。何もかも上手くいかない中、推しを推すということでも何とか生きている。推しが背骨。しかし、そんな推しが炎上し、芸能界から消えるとともに、だんだんあかりが壊れていく様子を描いた一冊です。自分も推しがいます。あかりほど推しで出来た体ではないですが、辛いことがあった時救ってくれることが実際にあります。私やあかりのように推しがいる人、推しではなくても憧れの方がいる人などは一度読んでみてほしいと思いました。



最終的に壊れ続けるあかりはどうなるのか考えてみたり、自分と重ねて読んでみたり、沢山の楽しみ方があるので誰でも面白く読める本です。

兄の名は、ジェシカ (ジョン・ボイン/著)

村上 舞歩



主人公サムは4歳年上の兄ジェイソンは、小さいころから面倒をみてくれていました。そんなある日ジェイソンは、髪をのばし、ポニーテールにし、自分はトランスジェンダーであることを家族の前で告白します。サムは兄の変化にとまどい、両親もとまどいを隠せていました。トランスジェンダーとカミングアウトされた周りの人の立場も考えさせられる物語です。

この本を読んで、自分の個性を見つけて大事にしていくことは大切だと思いました。恥ずかしがらずに勇気を出して行動しようと思いました。性に関する課題について考えさせられる作品です。

図書室の蔵書

令和4年5月末現在

	0	100	200	300	400	500	600	700	800	900			
	総記	哲学・心理学	歴史・地理	社会・教育	自然科学	工学・工業	産業・貿易	芸術・演劇	語学	文学一般	郷土	他	計
新書	1	4	9	27	7	1	2	4	2	13			70
文庫		10	4	5	3	0	1	2	2	271			298
漫画		1	20		2	12		123		3			161
単行本	20	50	59	178	61	21	18	76	31	537	163	2	1216
計	21	65	92	210	73	34	21	205	35	824	163	2	1745